

植民地統治初期における「台湾」言説 ——明治期の婦人雑誌『女鑑』を分析対象として——

磯部 香

1 本研究の目的と問題の所在

台湾は、日清戦争終結を迎えた明治28年に下関条約締結によって、日本の初めての植民地となった。終戦を迎える昭和20年までの約51年間、台湾は植民地として日本の支配下に置かれることとなる。

しかし日本における台湾統治は順調なスタートを切れたわけではなかった。領有当初より日本軍は日本統治に抵抗した「土匪」と呼ばれる反乱組織の武装蜂起に遭い、マラリア・ペスト等の伝染病によって多数の死傷者を出し、さらには中国語がほとんど通じないという言語問題に阻まれたりと、日本の台湾統治は難航を極めた（竹中 1995）。このような台湾統治の難しさから、台湾領有には巨額のコストがかかるとされ帝国議会においても問題として取り上げられるまでになっていた。だが結果として明治政府は「台湾の植民地経営を立派に『成功』させることにより、西洋列強と同様の地位を主張する」（丸川 2010: 32）という決断を下した。そのような背景により、明治政府は初めての植民地である台湾の経営をどんなことがあっても軌道に乗せ、成功に導かなければならなかったのである¹⁾。

そのような事情を抱えながら、内地（日本）においても外地（台湾）においても植民地経営をいかに行うかが急務の課題となっていた。小熊英二（1998）によれば、統治初期の段階において、有識者の間では、多くの植民地を所有していた先進国、イギリス・フランスの植民地統治法を学び、両国の統治法を台湾統治にいかに応用すべきかが議論となっていたと言う。しかしながら、外地人である台湾人をどうみなし、日本のなかでどう位置付けていくのかという大きな命題に決着をつけることができず、日本政府は、外地台湾人の処遇を「同化」と「非同化」の狭間で迷いつつも、明治29年に国語伝習所を台湾全島14箇所に設置し、明治30年には国語伝習所・国語学校に教育勅語を下付し、明治31年には台湾での初等教育に関する公学校令を公布するなど、日本人の精神を学ばせるべく日本語教育を導入し、「同化」の道へと舵を切ろうとする動きを見せている²⁾。そのような教育政策によって、国語（日本語）を習得した知識階層以上の台湾人男性が通訳・官吏に登用され、総督府が創った秩序へと台湾人男性が段階的に組み込まれていくこととなる。

だがその一方で、洪郁如（2001）によれば、台湾人女性の教育は等閑のままであり、明治40年代半ばまで女子教育にあまり力を入れてはこなかった。しかし時代を経て、日本から影響を受けた台湾人知識層の男性たちが、近代的知を有し「家庭」と「事業」を両立できる新しい女性を希求したことにより、女子教育の重要性を認知し始めることとなるのである。台湾における女子教育も男性同様に国語教育偏重カリキュラムでありながらも、中

等女子教育においては特に手芸と国語教育は重要視していた。そして大正中期（1920年）代前後、植民地台湾における女子教育結実の象徴として、「新女性」と呼ばれる日本教育を受けたエリート女性が誕生することとなる。彼女らは「家庭」において「良妻賢母」であることを期待されながら、近代的女性像・家族像を再生産する主体的な役割を台湾において担った（洪 2001）。

台湾で誕生した「新女性」の素地は、「新女性」誕生の約30年前に日本において生成された「家庭」や「良妻賢母」言説に地脈を有する。明治20から30年にかけて有識者たちが巻き起こした婦人改良や家族に関する論争、及びその啓蒙活動によって「家庭」概念と「良妻賢母」概念が形成され、その両概念はメディアを通して流布され、近代において女性を規定・拘束する重要な規範となっていく（小山 1991、牟田 1996）。特に「家庭」、「良妻賢母」の両言説は、婦人雑誌と称される明治中期以降に萌芽した婦人向けメディアによって議論され概念化されていく。婦人雑誌の中でも先駆的役割を果たした『女学雑誌』（明治18-37年）の創刊は、明治中期の女子（教育）界において大きなインパクトをもたらした。キリスト教系の女学校である明治女学校の校長であり、『女学雑誌』の発行人でもあった女子教育者巖本善治（1885-1904）は、自らが中心となって『女学雑誌』の誌面において「ホーム論」を巻き起こし、近代日本に相応しい新たな家族像や女性像の模索を行っている（犬塚 1989）。さらに他の婦人雑誌らが追随し、「家庭」を管理でき、性別役割分業を遂行できる女性、つまりは「良妻賢母」であることこそが日本女性の生き方であると位置づけ、さらにはそのような役割の遂行者こそが日本の国民であると国家と家族/家族と女性を連結させる論調を展開していくのである（磯部 2008）。明治中期以降、ジェンダー化された家族中心主義、家父長制の枠組みが敷かれ、家族がひとつの単位としてみなされ、さらには臣民でもある国民が、天皇を頂点とした「家族国家」という創出されたヒエラルキーのなかに組み込まれていく。

そこで本論文では、台湾の「新女性」のモデルとなり、「良妻賢母」言説の再生産に加担したであろう、「家庭」で「良妻賢母」を体现できる新中間層以上の日本女子たちが主な読者層であった婦人雑誌『女鑑』（明治24-42年）から植民地統治初期（明治中期・後期）³⁾の植民地「台湾」言説を抽出し、以下の2点のことを明らかにしたい。1点目は日本女子が主な読者であったことから、同性である台湾女子の言説を明治期の婦人雑誌『女鑑』はどのようなまなざしで見つめ、どのように切り取り、伝えたのか、2点目は『女鑑』は「台湾」言説を通して日本（内地）女子にどのような役割を付与・強化しようとしたのか、の2点である。

2 婦人雑誌『女鑑』とは

『女鑑』は「じょかん」と読む。創刊は明治24（1891）年で、明治42（1909）年に終刊

となったと推定される婦人雑誌である。発行総数は356冊確認されており、頁数が最も多い時は170から200頁であった。定価は20銭であった。約18年という長期にわたり発刊されている雑誌である⁴⁾。

特色としては、創刊号の巻頭において、皇后宮御製、華族女学校校長西村茂樹等の祝詞が掲げられていることから、国家や天皇と密接な関わりであるため、保守的や国粋主義の雑誌と断定されることも多い(中寫 1993)。

編集発行人・刊行形態などの変遷に関して、「表1『女鑑』編集発行人・発行者の変遷」を参考にすると、編集発行人は合計6回、刊行回数も3回変化している。明治25年1月5日から明治37年1月15日まで月2回の発行となっていることより、この期間が『女鑑』の最盛期があったと考えられる。

執筆者の性別に関しても簡単に言及すると、編集発行人は全員男性である(前掲「表1『女鑑』編集発行人・発行者の変遷」)。女性の執筆者は『女鑑』においては極めて少ないが、例外として、三輪田眞佐子(現三輪田学園創立者)が、「論説」において第21号(明治25.8.20)から良妻賢母の名のものと女子教育に関する内容の記事を合計212回にわたって長期連載を行っている。三輪田眞佐子は極僅かな執筆者は女性執筆者の一人である。三輪田眞佐子の他には、嘉悦孝子(成女学校学監)、棚橋絢子(東京高等女学校長)、小川直子(麹町女学校学監)、下田歌子(学習院女学部長)などの女性の女子教育者が執筆しているが、連載を行うことはほとんどない。『女鑑』は男性有識者が中心となり創刊発行をし、さらには女性の女子教育者が執筆を行っている点から考えても、女子の啓蒙を目的とする婦人雑誌であったと言える。

表1 『女鑑』編集発行人・発行社の変遷

発行年月日	号数	編集発行人	刊行	発行社
明治24 (1891)	第1号	西沢之助	月1回	国光社 *2
明治25 (1892)	第5号			
明治26 (1893)	第6号			
明治26 (1893)	第37号			
明治26 (1893)	第38号		編集人 山根勇蔵 発行人 川崎直衛 川崎直衛	月2回 *1
明治30 (1897)	第132号			
明治30 (1897)	第133号			
明治35 (1902)	第246号			
明治35 (1902)	第247号			
	*3			
明治37 (1904)	第14年2号			
明治37 (1904)	第14年3号			
明治39 (1906)	第16年5号			
明治39 (1906)	第16年6号			
明治41 (1908)	第18年8号			
明治41 (1908)	第18年9号			
明治42 (1909)	第19年3号			
		国光社 (橋本忠次郎)	月1回 *4	女子新聞社
		中川愛水(良平) *5		

*1 明治28(1895)年4月 この月のみ発行のみが1回
*2 明治33(1900)第214号より発行元が静思館に変更。発行社が変わらず。
明治35(1902)第244号で、発行元を国光社に戻す。
*3 明治35(1902)第267号で、号数表記の通算号数はここまで。
明治35(1902)第244号で、発行元を国光社に戻す。
*4 明治39(1906) 4月のみ臨時増刊で発行が2回
*5 以後の発行は確認できず。この号が再発号と推定されている。
出典：清水やすし1996「日清・日露戦の『家』密探—婦人雑誌『女鑑』を中心に—」
『法政史学』48: 105-119 の表1『女鑑』全356号発行形態一覧表より筆者作成。

読者層に関しては、若干の先行研究と記事から推定すると、第 142 号（明治 30.10.5）の「雑報」の「中等教育と新聞雑誌」のなかで、東京府高等女学校の 361 人に対して行った「常に家庭に於いて愛読せる新聞雑誌」調査を行っている。そこで、第 1 位『女鑑』114 票、第 2 位『少年世界』92 票、第 3 位『太陽』64 票、第 4 位『新聲』、『小国民』15 票、第 5 位『家庭雑誌』12 票であったことから、比較的広く読まれていたのではないかと考える。備考として、「右（愛読雑誌投票）は概ね家庭に於て父兄の購入せしものに係り、女鑑、家庭雑誌等数種を除くの外、故に生徒の購読せしものなり」（『女鑑』明治 30.10.5: 70-1）とあり、家族が女子に好んで『女鑑』を読ませていたことが分かる。また、教員検定試験問題が連載されていることから、高等女学校の年代の女子やその家庭、年齢層は結婚年齢期の女性が読者であったとも推測されている（清水 1996）。以上より、一部の裕福な都市新中間層以上に限定されるものの、ある一定の読者層を獲得していたことはほぼ間違いのないと考える。

次に、『女鑑』の論旨について説明する。『女鑑』がなぜ創刊されたのかという理由が、創刊号の「発行の趣旨」に掲載されている。

・・・西風漸く競ひ、欧州文物の輸入愈々旺盛なるにあたりて、濶袖は蜂腰の服と變し、女大學はリーダアと化す。従ふところの教師は、西洋婦人にして、就く所の學校は、耶蘇協會なり。未一行の書牘だに解し得ずして、先欧語を修め、朝夕の礼節もしらずして、交際を衒らふ。・・・優美温和の美德は、屹 飢疎暴の風となり、素質・儉勤の慣習は、浮華潤飾の俗となる。・・・己漸く傍訓の新聞紙を読み得れば、家嫗の迂遠を嗤ひ、僅かに一片の修業の證書を有すれば、其の夫を蔑にす、而して又女權の拡張を唱ふる者の如きに至りては、吾人言う所を知らざるなり。既に傲慢を以て心を充塞す。・・・全国幾所の女學校、其の建築の宏壯、其の宏大なる、真に良妻、賢母を養ふに足るものあるべし。貞淑なる徳性を涵養して、婦女たる者を、養成するに足るものあるべし。・・・畢竟するに、女子教育の本旨は、其の淑徳を啓發して、男子の功業を扶くるに足るべき、良妻たらしむるにあり。健全忠勇なる兒孫を養成するべき、賢母たらしむるに在り。技藝智巧の如きは、枝葉のみ、根幹にあらざるなり。其の末を重くして、其の本を忘る。・・・女鑑は、貞操節義なる日本女子の特性を啓發し、以て世の良妻賢母たるものを養成するを主旨とす。（『女鑑』明治 24.8.8: 1-5）

要約すると 3 点挙げられる。1 点目は、キリスト教主義女子教育、欧化主義への傾斜に対する批判である。キリスト教系の女学校は書籍を読む理解もないうちから先に外国語を教え、礼節をわきまえず、交際をひけらかすとある。キリスト教主義女子教育や西欧化を日本人が受け入れるような状況は、古き良き日本女子の徳性を忘却してしまう恐れがあるあとと言及する。2 点目は、日本女子の持つ貞淑な徳性を授けるような女子教育普及の必要性を説いている。うわべだけで口が上手く、夫を蔑み、女權拡大を主張するような昨今の女

子の状況を批判しつつも、一方では良妻賢母を養成できるような女学校が全国に存在し、『女鑑』が求めるような女子教育が整いつつあることも述べている。3点目は、明治20年代には失われつつあった日本女子の特有であるとする「貞操節義」こそ、日本女子の徳性であり、日本女子にふさわしいという女子教育論を展開している。男性を補助し、「健全忠勇」な子どもを育成できるような女性、つまりは良妻賢母の養成と、「貞操節義」である良妻賢母思想を読者である女子たちに啓蒙することこそ『女鑑』の本分であったと言える。

3 分析方法

分析方法は以下の通りである。

分析期間は、『女鑑』が創刊した明治24年から終刊したと予想される明治42年の約18年とした。分析対象は『女鑑』合計356冊の全ての記事である。分析方法は『女鑑』における「台湾」言説及び植民地統治に関する言説を抽出し、『女鑑』はどのように「台湾」を捉えていたのかである。そして抽出された「台湾」言説が文脈の中で、読者である新中間層以上の日本（内地）女子たちに何を伝えようとしていたのかを明らかにする。

4 分析結果

分析結果は以下の通りとなった。

明治28年から明治41年まで、「台湾」言説及び植民地に関する記事を82本『女鑑』から抽出することができた。また82本の記事を、「台湾の習俗」、「日本教育の進捗状況」、「故北白川親王・台湾神社関連」、「天皇皇后の御救恤」、「台湾女子の性質や習俗問題」、「台湾（女子）の内地留学」、「植民地政策関連」、「日清戦争・在台軍隊関連」、「その他」にカテゴリー化することができた（参照「表2『女鑑』における「台湾」言説の変遷」）。

表2を参考にすると、明治28年から明治34年の6年の間に記事が多く見受けられることから、内地日本が台湾を領有した直後、台湾に強い関心を持っていたことがわかる。さらに明治34年においては、故北白川宮能久親王を奉るための台湾神社建設に関する記事が集中している。故北白川宮能久親王は「土匪」の内乱を鎮圧すべく台湾で軍隊を率いて討伐を行っていたが、平定半ばにして台湾で薨御している。薨御から6年が経過し、明治34年に故北白川宮能久親王を奉るための台湾神社鎮座式のため妃富子が渡台するという行事も記事が集中する要因となっている。台湾神社の祭典は第237号の「台湾神社祭典の準備」（『女鑑』明治34.9.5:65-6）によれば、内地人も二百余名の委員会を組織し、台北市民も動員され、総督府が関与する大きな祭典を挙行することによって台湾の平定及び日本

表2 『女艦』における「台湾」言説の変遷

	台湾の習俗	日本教育の進捗状況	故北白川親王・台湾神社関連	天皇皇后の御教諭	台湾女子の性質や習俗問題	台湾(女子)の内地留学	植民地政策関連	日清戦争・在日軍艦関連	その他
明治28	「生蕃の結婚式」(85号) 「台湾の風俗」(87号)	「勉勵及令旨」(88号) 「台湾の語学教授」(98号)	「北白川宮殿下襄陽」(98号) 「台湾に北白川神社を建てんとの説」(98号)	「皇后陛下御令旨」(93号) 「慰勞金御下賜」(100号)	「台湾の頗良婦人の率先者」(92号) 「支那婦人の足の纏さん」(95号) 「台湾の烈婦」(98号)		「婦人の任務及其の任務を究すべき方法を明らかにす」(上)」(85号) 「婦人の任務及其の任務を究すべき方法を明らかにす」(三)」(87号) 「婦人の任務及其の任務を究すべき方法を明らかにす」(下)」(91号) 「戦後婦人の任務に就きて」(92号) 「國家に対する婦人の事業」(98号) 「國家に対する婦人の事業(つづき)」(99号)	「早田中隊長敢死を神廟に献ず」(93号) 「基隆土民萬承を神廟に献ず」(93号) 「大砲奉納」(98号) 「貴婦人の恤兵献金」(100号) 「軍犬の喪」(初夢)」(101号)	
明治29		「日本語講習生の選拔」(105号) 「台湾学務部の計画」(107号) 「台湾の非復讐士殿」(115号)			大谷穂満「台湾の女子」(118号) 大谷穂満「台湾の女子(つづき)」(121号) 大谷穂満「台湾の女子(つづき)」(125号)	「非客児孫の留学」(106号)	「新版図に対する婦人の覚悟」(107号)	「胎定は標頭一顧」(109号) 「結婚の雙烈」(122号) 「不死返」(117号)	「美草」(105号) 「結婚書式」(106号)
明治30	「台湾の生蕃宮閨を拝す」(136号)	「台湾の生徒」(131号) 「台湾の女子教育」(135号) 「台湾語学学校生徒の参拜」(139号)		「皇后陛下のみめぐみ」(130号)					「皇后陛下に台湾婦人の贈品を献上す」(124号) 「新高山」(139号)
明治31	「台湾の月に対する観念」(148号) 「台湾主要地名の誤方」(152号)	「新領地の女子教育」(159号) 「台湾教育談」(160号)	「故北白川宮」(160号)		「烈婦」(169号)	「台湾女学生の東京留学」(158号)	「台湾土人の養育」(158号) 「教老会」(162号)		
明治32	「台湾の早産」(175号)	「台湾師範学校」(180号)		「皇后陛下の御仁徳」(185号) 「聖恩無量」(180号)					「蓮花献上」(172号)
明治33	「萬國典の結婚式」(200号)			「御教諭」(215号)			「日本島万歳調」(216号)		
明治34			「台湾神社祭典の準備」(237号) 「皇族御選台」(237号) 「台湾官吏の饗宴」(237号) 「台湾神社祭典式記念切手」(237号) 「台湾神社祭典式唱歌」(239号) 「北白川宮殿下御出発期」(239号) 「北白川宮殿下御廟像工事」(239号) 「台南陳列所」(239号) 「台湾神社鎮座式」(240号) 「龍久親王六週年祭」(240号) 「北白川宮妃殿下御上被御模範」(240号) 「北白川宮殿下御下賜金と寄付」(240号) 「地学協会の台湾神社巡拝式と臨時総会」(240号) 「皇后陛下に御大願」(242号) 「北白川宮妃殿下」(242号) 「記念の御模範」(242号)	御教諭(225号)					
明治35				御教諭(248号)					
明治36					東川橋舟「辺境の女子」(19-20号)				「台北の婦人慈善市」(第13-7号)
明治37							「台湾の地久節」(第16-8号)		
明治38									
明治39									
明治40									「台湾館」(第17-5号)
明治41					菅谷久次郎「台湾の美人」(第18-8号)				

の新領土に組み込まれ統治されたこと内外にアピールすることとなり、さらに妃富子が女の身でありながらも悠然と渡台する様子を台湾神社の祭典の様子と共にメディアを通して流すことによって、渡台した富子の様子を台湾人が見て「人々愈々恐れ入り奉りたりとぞ」（『女鑑』明治 34.12.5: 81）とあることから、台湾神社における一連の祭典は、皇族やひいては天皇に対する威厳や敬意を台湾人が持ち始めていることを『女鑑』は述べているのである⁵⁾。

さらに、表 2 で注目すべきは、日本男性と台湾男性に関する言説のみならず、台湾に関連する日本女子及び台湾女子の言説も多く存在していることである。表 2 のなかで、主に明治 28・29 年に多く抽出された「台湾女子の性質や習俗問題」、「植民地政策関連」のカテゴリーに分類される言説である。台湾女子の習俗や特質、日本女子の植民地台湾に対する心構えに関する記事が多く見受けられることから、『女鑑』は読者を女子と想定し、日本女子と台湾女子の関係性をメディアを介してつなぎ、発信していると考ええる。

「台湾女子の性質や習俗問題」に関する言説は、台湾女子の素養や台湾女子が置かれている実情を問題も含めてレポートしたものであり、「植民地政策関連」は、新たな領土を手に入れた日本（内地）女子に対する心構えや責務に関して述べられている。

以下、「台湾女子の性質や習俗問題」、「植民地政策関連」のカテゴリーの言説の特徴をまとめることができた。

4.1 台湾（外地）女子と日本（内地）女子の類似と差異

まず『女鑑』における「台湾」言説の 1 点目の特徴は、台湾女子と日本女子の類似と差異である。

第 13 年 20 号の東川楊舟の「辺境の女子」によれば、

台湾及び澎湖島の我領籍に帰したるは、明治二十八年の事にして、年を関する極めて浅きを以て、未だ我が王化に潤はあるものはあるは固より怪むるに足ず。・・・史家の所謂売買婚的の婚姻行はれりて、男子を有する者は、其の幼少の時より相当の家の女子を購ひ求めて、これを息子のいひなづけの嫁となし・・・人世の一大重事なる男女の結合を金銭を以て取計ふの一事は、厭くまで排斥せざるべからず。・・・婚姻を以て終生的の結合となるの点、及び女子の溫柔にして、且つ節操堅固なるの点は、特に大書するの価値あり。

聞く二十八年の兵乱の時の如きも、台湾婦女の危険の為に節操を枉げず・・・。（『女鑑』明治 36.10.15 : 55-5）

とあり、金銭が介在し、女兒を婚家に養女に指し出す媳婦仔（シンブア）を女子の人身売買として問題化している。同様に纏足の習慣を台湾女子への悪習として非難する記事も見受けられる⁶⁾。着目すべきは、台湾女子の素質を示している言説である。上記にもあるよ

うに台湾女子は節操堅固であり、『女鑑』はそれに価値を置いている。同様に大谷聴濤の第121号・第125号の「台湾の女子（つづき）」にも、媳婦仔や纏足を非難しながらも、

台湾の女子は、其の心頗る高潔にして、物を与えるも妄に之を受けず又之を受くるときは、務めて、返礼を為すは、殆んど支那人の血統を引きしものとは思はれず、此の点に於ては其の性情我が内地人に類せり……。『女鑑』明治29.11.20:11)

続いて第125号では、

台湾の女子は、毫も其の子を教育するに意をとどめず。時としては、木片或は箒をもて、其の子女を撲ち、甚だしきは之を屋外にまでも追回るなど、見るに堪へざる……。教育法及養育法に就ては、此の如く不完全なれど、日没後、……団欒して、……相談し、相笑ひ、相興じ、……之を内地人の家庭に用ゆるも不可なりとせず……。『女鑑』明治30.1.30:7-9)

とあり、教育や教養⁷⁾に関しては不完全であるものの、一家団欒で談笑したりすることを評価しており、また台湾女子の素質として高潔さを具えている点において「支那人」とは相違し、日本女子に似ていると好意的に捉えている。さらに東川楊舟の「辺境の女子」の台湾女子の貞節堅固な点が『女鑑』の言う日本女子が元来有する徳性と類似することからも、一家団欒や高潔さ、貞節堅固などの素質は、台湾女子と日本女子をつなぐものであり、両女性に類似性を見出そうとしていることが分かる。

しかし、『女鑑』は台湾女子を取り巻く媳婦仔（シンプア）や纏足を悪習として非難し、さらに台湾女子を無教育で無養育とみなし、台湾女子と日本女子との差異性についても言及している。『女鑑』における「台湾」言説は、両女子の類似性のみならず、両女子の差異性をも浮き上がらせている。

4.2 日本女子の責務

次に新たな領土を獲得したことによる、日本女子に課せられた責務に関する言説に関して言及する。第92号の「戦後婦人の任務に就いて」と第99号の「国家に対する婦人事業（つづき）」を参照すると、

我版図に帰したるものを、同化するには、種々の手段を用るし中にも、宗教と学説により、先自国の言語を教えて、其の感情を惹くの道具に供し、以て其感化を導きたるもの、最も多きに居ることにて、之が衝に当りしものは多く女教師にして、是亦婦人の任務としたる所なり……。『女鑑』明治28.8.20:1-18)

とある。日本人に同化する手段として国語教育の重要性を説き、さらに国語教育に従事す

るものに女教師が多いことから、国語教育を通して同化を導くことができるのは日本女子の役割だと説く。

次に第 99 号では、

婦人も、国民として、国家に対する任務は、いささかも、男子と異なることなし、……天然の性質、能力の違う点は、止むことを得ずといへども、国民として為すべき事業中の、婦人に属するものは、自進みて、これに当たらんことを望むなり。……わが姉妹緒嬢担任すべき国家事業は、こまかに、これを別てば、乃、衛生となり、教育となり、慈善となり、……帝国の新領地＝台湾＝に於ける移住、教育、衛生、産業等に向ひて、大いにわが婦人社会の奮励を計ること、是なり……台湾を拓殖して、富強なる新日本国をなせんとせば、将来、是非とも、男女の共住を謀らざるべからず。……台湾を、本土と、区別なからしめ、充分なる国家の機関をととのへ、……しこうして永住の長計の、その第一着は、男女相提携し、相補助し、以て専ら拓殖の策を講ずるとともに、教育、生活、衛生等の日用庶務に、欠陥なきを期せざるべからず。これ、吾人が、この際、わが賢良なる姉妹諸嬢の一部が、決然南航の気を鼓せんことを要むる所なり。……(『女鑑』明治 28.12.5:1-4)

とあり、『女鑑』は日本女子も男性と連携し、国家事業に参加すべきであると主張している。女子が担うべき国家事業は、主に衛生・教育・慈善であり、性差に基づき、本来私領域で行うべきとされるような女子の役割が、拓殖事業の女子の責務として新たに加えられている。そして将来、『女鑑』の読者の一部が夫と共に渡台し、台湾で共住ことをすることを望んでいる。

だが第 107 号「新版図に対する婦人の覚悟」(『女鑑』明治 29.4.20:1-4)によれば、台湾に移住できる日本女子には条件があり、「教育有り身分有る婦人諸子」であることが渡台の条件として付け加えられ、さらには女子特有の能力を発揮し、「直接に彼等の啓発者となり、誘導者となるべき」責務を日本女子に課している。『女鑑』は夫婦一丸となって台湾における拓殖事業を発展させることを第一の目的とし、その拓殖事業の中でも日本女子が担う役割とは台湾女子を正しく教え導くことであった。

5 まとめと考察

以上より、分析結果を以下の 3 点にまとめ、考察を行なった。

1 点目は、明治 28 年から明治 34 年の植民地統治初期において、「台湾」言説が多く見受けられた。『女鑑』は約 6 年間に渡り、台湾の記事を取り上げていることから、その時期に内地日本では台湾に興味関心を向けてことが分かった。また、『女鑑』から抽出された記事

を「台湾の習俗」、「日本教育の進捗状況」、「故北白川親王・台湾神社関連」、「天皇皇后の御救恤」、「台湾女子の性質や習俗問題」、「台湾（女子）の内地留学」、「植民地政策関連」、「日清戦争・在台軍隊関連」、「その他」のカテゴリーに分類することができ、『女鑑』は台湾女子に誌面を多く割いていることから、読者である日本女子に台湾女子に興味を抱かせようとする意図が見受けられることが明らかとなった。

2点目は、「台湾」言説の分類のなかでも、明治34年の故北白川能久親王台湾神社の祭典に伴う妃富子の渡台に関する記事が多く見受けられることを鑑みると、この一連の行事を記事にすることによって、新領地台湾が日本のものであることを内地人に改めて認識させる契機となり、さらには神社の建設を通して、天皇を主柱とした近代日本の統治システムに植民地台湾が組み込まれたことを内地のメディアを使用して内地人に知らしめたと考える。また、女性的身でありながらも富子が気丈に一人渡台している言説も、夫の御霊のために辺境の地である台湾まで赴き、夫の御霊を慰撫する姿を逐一記事とすることで、『女鑑』が理想とする「貞操節義」なる良妻（賢母）像を『女鑑』の読者である新中間層以上の女子たちに繰り返し見せしていると捉えることができる。故北白川能久親王の妃富子の渡台言説は、新中間層以上の女子にとって良妻賢母像のお手本であり、女性の生き方をモデル化し提示していると思われる。

3点目は、高潔で、貞節堅固、一家団欒を重んじ、台湾女子の素質と日本女子の素質に類似性を導き出しておきながらも、悪習に絡めとられ、無教育無養育である点において両女子を分断する差異性を秘める言説が同時に抽出されたことである。日本女子と台湾女子の類似言説を通して、台湾女子を「支那人」という民族から分離させることを意図とし、日本女子と同じカテゴリーに入る可能性を暗に示唆しながらも、無学無教養な台湾女子を悪習から解放し教え導くのは、教養や階層の高い日本女子である言説の表出から、『女鑑』は日本女子と台湾女子の間にヒエラルキーを構築させようとしていたと考えられる。以後約51年に渡り、この類似と差異は矛盾を潜ませながら台湾女子、台湾に移住した内地女子を常に悩ませ続けることとなる（洪 2001、竹中 1995）。性差を重視し、日本女子に台湾女子を教え導くという新たな役割・責務が日本女子に付加されたことが明らかとなった。植民地台湾を媒介として台湾女子と日本女子の間に非対称な関係性が新たに構築されたのである。

最後に、内地においての上記のような言説がある程度一般化できるのか、また『女鑑』から抽出された「台湾」言説がこの時代の日本においてどのような意味を持つのかを今後同時代の他の史料と照合し相対化する予定である。約18年という長きに渡って発行された単体の婦人雑誌『女鑑』における「台湾」言説の変遷を通して、台湾統治システムに台湾女子を組み込むため内地女子との類似性（包摂）⁸⁾の強調と、類似性の強調の裏側に存在する台湾女子と日本女子の差異化（排除）というジェンダー化されたレトリックを読み取ることができた。常に感化する側に身を置くこととなった日本人女子と、常に感化されざるを得ない立場となった台湾女子との関係性の可視・（時には伸縮するけれども）固定され

た非対称化こそが、近代日本の植民地統治のメカニズムである。統治メカニズムは日本人男性と台湾男性の間に成立した支配－被支配関係を投影しており、そのジェンダー化された統治のメカニズムは、統治初期において日本女子の責務の拡大、さらには日本女子の規範の強化を日本女子にもたらしたと考える。

しかし、男性の支配－被支配関係のメカニズムでは読み解けないであろう、女性間の非対称な関係性が婦人雑誌を対象とすることで見えてはきたが、性差が交差する非対称な関係、台湾人と一括りにはできない多様な民族構成の中で、台湾女子として括り言説化していること自体にもポリティクスが潜むことも課題としてここに挙げ、結びとしたい。

[注]

- 1) また丸川によれば、「台湾における公的な建物や道路などのインフラ整備には、内地以上に重視された部分も見受けられる。台湾は、日本が植民地帝国主義への道程を歩む一大実験場となった」(2010: 32) とある。
- 2) 台湾総督府による台湾人(外地人)の「同化」政策は、約51年の統治において一貫してはおらず、そのため台湾人は日本人であって日本人でないという「包摂」と「排除」の狭間に常に置かれ、曖昧な存在としてみなされ続けた(小熊1998)。
- 3) 本論文で使用されている「植民地統治初期」に関して少し語弊を招くおそれがあると思われるのでここで説明しておく。本論文では、日本で発行されていた単一の婦人雑誌を分析対象としており、日本が植民地台湾をどう捉え、その動向を婦人雑誌がどのように切り取り、読者であった日本女子にどのように伝えようとしていたのかという、日本国内(内地)での植民地「台湾」に関する言説分析を目的としているため、植民地台湾で創刊発行された雑誌を分析対象とはしていない。また、本論文の指す「植民地統治初期」の時期区分に関しては曖昧であるが、「台湾」言説の変遷を知ることも目的のひとつであるため、『女鑑』の創刊から終刊までの約18年間を「植民地統治初期」とし、台湾領有以前の期間も分析対象とした。
台湾の統治区分に関しては、台湾(女子)教育の法令に依拠し、台湾統治期を第1期から第4期に区分した山本禮子の『植民地台湾の高等女学校研究』(1999)などが挙げられる。統治区分に関しては、研究領域や研究者によって違うため、今後台湾植民地研究を行う上で検討すべき課題のひとつであると考えている。
- 4) 中寫邦(1993)は、「これまでの日本近代の女性研究はどちらかといえば女性解放の路線につながるものが重視されてきた。従って本誌のような性格の婦人雑誌は殆ど問題にされてこなかった。しかし明治末期に至る約20年間の発行はそれなりに社会的影響をもったことを示しているし、同時に明治という時代の変貌も自ら反映されざるを得なかったと思われる。その意味においてこの体制的婦人雑誌がどのような役割を果たし、影響を与え、消えていったかを再検討することは、時代を知り、その時代の女性

像の一つの典型を探るよすがとなろう」（中寫 1993: 2）とあり、『女鑑』分析の重要性を示唆している。

今回分析対象とする『女鑑』は、大空社から 1989 年から 1993 年まで出版された復刻版を使用した。

- 5) 以後、大正 12 年に皇太子（後の昭和天皇）の台湾神社への参拝等、台湾神社は皇民化政策において重要な位置を占めていくこととなる。
- 6) 第 95 号「支那婦人の足の矯さん」（明治 28.10.5）など、日本人の纏足への批判が高まったものの、纏足を解く女性は少なかった。総督府は大正 3 年に漸く纏足禁止と纏足解放の通達を出した（台湾女性史入門編纂委員会編 2008: 118-9）。
- 7) 台湾女子の教育に関しては、第 159 号「新領地の女子教育」（『女鑑』明治 31.6.20: 83-4）などに、男子の教育に比べ女子の教育が振るわない状況の原因は、女性は売却される財産だという観念があるからだと言い、それが台湾女子の教育が進展しない理由と捉えている。最後に女子教育は「最、困難にして、苦心経営を要すべきこと多し」としめくられている。
- 8) 注 2) 参照。

〔文献〕

- 磯部香, 2008, 「明治中期・後期における「家庭」言説をめぐる家族とジェンダー——『女鑑』（明治 24～42 年）を分析対象として」。
- 小熊英二, 1998, 『＜日本人＞の境界』新曜社。
- 洪郁如, 2001, 『近代台湾女性史——日本の植民地統治と「新女性」の誕生』勁草書房。
- 小山静子, 1991, 『良妻賢母という規範』勁草書房。
- 丸川哲史, 2010, 『台湾ナショナリズム——東アジア近代のアポリア』講談社。
- 牟田和恵, 1996, 『戦略としての家族——近代日本の国民国家形成と女性』新曜社。
- 中寫邦監修, 1989 - 1993, 『女鑑』復刻版, 大空社。
- , 1993, 『女鑑——解説・総目次・索引 第 9 回（別巻）』大空社。
- 犬塚都子, 1989, 「明治中期の「ホーム」論にみる家庭観と家政観」『家族関係学』8: 15-20。
- 清水やすし, 1996, 「日清・日露期の『家』意識——婦人雑誌『女鑑』を中心に」『法政史学』48: 105-19。
- 台湾女性史入門編纂委員会編, 2008, 『台湾女性史入門』人文書院。
- 竹中信子, 1995, 『植民地台湾の日本女性生活史 明治篇』田畑書店。
- 山本禮子, 1999, 『植民地台湾の高等女学校研究』多賀出版。

（いそべ かおり 奈良女子大学大学院博士研究員）

Discourse “Taiwan” in the Early Colonial Administration Period : Women’s Magazine “*Jokan*”(Meiji Period 24 -42) as the Analysis Target

ISOBE Kaori

Abstract

Taiwan was Japan’s first colony and was held under its control for 50 years until the end of World War II in 1945 (20th year of Showa period) . The purpose of this study is to analyze the publications of the women’s magazine “*Jokan*” from 1891-1909 (24th to 42nd of Meiji period) and to find out: 1. how Taiwan was described at the beginning of Japanese governance, and 2. how the discourse of Taiwanese women was covered, paying particular attention to the manner with which the publisher chose to portray new mid- class readers’ roles and emphasized them.

As a result of the study, from 1895 to 1908 we picked up articles about the progress of Japanese language education, the lives and customs of the Taiwanese women and those who studied in Japan. What was found was: 1. While the publisher clearly recognized the difference between Japanese women and Taiwanese women, the possibility of "assimilation" was on their mind. 2. Although the publisher expected Japanese women to be dutiful wives and devoted mothers in Japan, in the new colony, they were expected be active in supporting immigration, education, health, and industry. In short the magazine contained various double standards.

(Keywords: role of Japanese women, one's philosophy about Taiwanese women colonial policy, discourse, women’s magazine, modern era)